

研究の乘

日本古建築研究の乘(第四十回)

天沼俊一

第三十五 須彌壇及臺座(下)

室町時代

當代は建築には折衷様が、大成されたが須彌壇の方はさうでもなかつた。純唐様の勾欄親柱の開花蓮はいろいろの形を生じてきた。

第四一五・四一六圖は、愛知縣東春日井郡品野町、定光寺本堂のもの。前者は其側面を、後者は正面の一部をみせたのである。壇は素木で比較的簡單であり、勾欄親柱は圓く「胡麻殻決り」があるが、隅のも柱つきの半柱も架木の直徑位の平たいところがあり、柱身と柱頭の開花蓮との接續も幾分不満足のやうに思はれる。

類例を見ぬ位に變つてゐるのは勾欄正面のところ、

平桁の先きは懸魚を縦に二つに割つたやうな形に下方に曲り(別に木を曲つたやうに)、架木の先は鯨の形が刻してある。大棟の兩端にのつてゐる當代の鯨はなくもないが、かかるところへ用ひたのは、恐らくこれだけではあゝるまいか。

第四一七圖は、廣島市郊外、安藝郡牛田村不動院金堂須彌壇の一部である。唐様の建築であるから、佛殿といふ名が最も適してゐるやうだが、金堂といふのださうである。壇も亦唐様であるが、線形等は餘りに技巧を弄し込み入りすぎて反てうるさい感がある。羽目板に入れてある牡丹も、もう少し簡單にすればいいのと思はれる。

勾欄親柱に特徴あり、四角で隅は唐戸面のやうにして

ある。四角な親柱は和様には見ない。柱が四角だから自然頭の花も四角であるのは、既に前號に記した長保寺本堂(第四一〇圖)の如くなるが、上の方の未開の部分を莖の一部と見たか、或は取手とでも考へたのか、全く形を變へ、瓣を下の方にほり、上は一方へ曲けてある。蓮だか何だか判らぬとしても、とにかく花が逆になつてゐるから、「逆蓮」といふ名をつけても、これなら大した不都合でもないであらう。平栿も繰形をつけて多少細工がしてあるし、蓮葉も大に意匠を凝して左右に長くのばしまた正面中央より左右同じ位のとりに、雲にのれる日月を、架木平栿の間に入れてあるなど、精巧ではあるが大して感心しかねる壇である。

第四一八圖は尾道市西國寺本堂のもの。此堂は『特建國寶目錄』には「室町？」としてあるが、「？」印は不用で室町とみていいと思ふ。堂ばかりではなく、壇も亦そのやうである。此も亦折衷様で、上下に唐様式のくり形をくり返し、羽目板は上下に樞をやり、適當の間隔に束をたて、さうして羽目板には例の格狭間を入れてある。此は

恰も正慶二年と稱する大法守三重塔(長野縣小縣郡澁野村)須彌壇の直系で、鎌倉末にあつて此種の格狭間を入れた折衷様須彌壇の延長と見られるから、これで頗る面白いのである。さうして彼の寶珠柱は、圓教寺金剛堂の如く全く節がなく、寶珠の形も略ぼ三角形をなしたものであるのに此は柱身と柱頭との境界、即ち柱身の上部に蓮花瓣をほつてあるが、これは大に興味のあることで、室町には間かゝる例を見出すのである。

第四一九圖は大福光寺(京都府船井郡高原村)本堂の裏手にあつた小さい壇——ことによつたら厨子の臺座かも知れぬ——の側面一部を示したもので、此亦同じく折衷様のもの。例の格狭間の内部の花が發達して上にまで達し、且つ蔓の上から葉を一枚づつ左右に廣げてゐる。此格狭間の上の部分を中心から右でも左でも半分だけみると、鎌倉室町の懸魚の鰭(例へば峰定寺本堂厨子、或は東福寺三門山廊又は東司等)と、殆んどいふよりは全く同じといつてもいい事にきがつくと自然この時代の見當がついてくるのである。前例でも此でも、和唐混淆でありながら、少しもおかしく見えぬ點

に注意すべきである。

第四二〇圖は三重縣阿山郡島ヶ原町の觀菩提寺本堂（俗に正月堂といひ、この方が遙に通りがよるしい）ので、これは和様であるが、壇の前に供物臺の様なものを取付けてしまつたものだから折角立派な格狭間が隠されてしまひ、今では其下へもぐらなければ、いい形が見られない。此圖は上下樞と兩方の束との間に挟まれた羽目板格狭間の一で、其上下の曲線は、奈良市極樂院本堂外部材料椽間の臺股のとよく似てはゐるけれども、これはやはり一般に考へられてゐるやうに室町としておいた方がよるしい様である。此場合須彌壇は至極平凡であるし、うまく全景はとれぬから、特徴のある格狭間を圖示しておいたのである。

第四二一圖は一乗寺本堂（兵庫縣加西郡下里村坂本）須彌壇の一部である。本堂は國寶にはなつてゐないが、壇は中々立派なもので、室町時代の手法が洵によくでてゐるから、其最もよく判るところをだしておいたのである。此と其次の

第四二二圖と比較するならば、よくもかう同じやうな

ものが存在すると思ふであらう。前號第四〇四圖にだしたあの形が、發達したのか退化したのか、何れか知らぬが第四一九・四二〇圖の如きものができ、更に一轉してかういふ形になつたのであらう。此は播州加古川、刀田山鶴林寺本堂の一部で、應永四年のものといふことが判つてゐるのだから、従て前圖のも此と相距ること遠くないことが、直に推察できるのである。いつもかく通り、これなどは公式の一つとして頭の中へしまひ込んでおくべきものである。

第四二三・四二四圖は、信州信濃の遠照寺（Onyōji）（上伊那三義村大字山室）釋迦堂の須彌壇全景及び右側面の一部を示したものの。此建物に就ては、既に雜誌「佛教美術」第十二號に、多くの圖を入れて一通かいておいたから、詳細のことが必要なら、之れを見られたいのである。

此壇も亦折衷様に近いもので、上下にくり形があり、其間の羽目板に、全部牡丹に唐獅子の透彫が入れてあるが、其姿勢は何れも異なり、唐草も亦實質と空間とがうまい工合に配合してある。かかる透彫をしてあるところ

は、多くは其輪廓が格狭間であるのに、ここでは一種縮りのない拙い形をしたものの中に入つてゐる。此の輪廓は感心できぬが、中の彫刻はよくできてゐる。

此透彫は、同縣下伊那郡下條村大字鎮西野にある大山田神社の、應神天皇を祀つた社殿内の厨子の板扉に、極彩色で描いてある牡丹に唐獅子と洵によく似てゐる。獅子と牡丹と双方關係があるかどうか知らぬが、同時代で同地方だから、鶴林寺本堂須彌壇と一乗寺本堂の夫れと、羽目板にほつてある格狭間の形が殆んど同一であると同様、似たものができる方が當然といへるであらう。

勾欄及寶珠柱も唐様で、これはさう變つたところはないが、間に入れてある蓮葉束は、葉が大きいこと不動院の本堂の如く(第四一、七圖)、莖はあれより尙一層細いから、平桁地覆間の部分(同じである)と釣合がとれてゐない。

此檀上安置の多寶塔心柱銘は随分長い文句であり、其中の一部分は嵯峨の常寂光寺多寶塔棟札の文句と殆んど同じところもあるが、最後に

于時文龜二曆壬戌二月二十三日始之六月一日建立畢

日本古建築研究の葉(四十回)(天沼)

とあるから、此堂——従つて壇——も亦、其頃とみられる。

第四二五・四二六圖は北室院本堂ので、一は寫眞、一は立面圖である。北室院は法隆寺東院傳法堂の裏、中宮寺門へ向て左手に南面して建つてゐる寺である。あの邊一體に須彌壇といへば殆んど和様に限つてゐるのに、珍らしく此は純唐様といつてもいゝ位、異彩を放つてゐるのである。尤も興善院持佛堂のも勾欄だけは唐様だが、壇は折衷様で、羽目板に格狭間を入れたりしてゐる。

堂が小さいから、壇も夫れに相應してやはり小さいが前例とちがつてこれは最下部によく延びたきやしゃな脚があり、羽目板に例の如く牡丹に唐獅子を入れてあるが其上下の簡單な縁形一つ隔てた狭い平たいところに、下には浪、上には唐草を現はしてゐるのは、注目に値するのである。

勾欄に於いて、料束は和様ののと變りないが、親柱の胡麻殻決りは角がたつたやうで、兩方からつまみあけたやうに稜線に近くなつたため、全體が古典建築の柱にみる



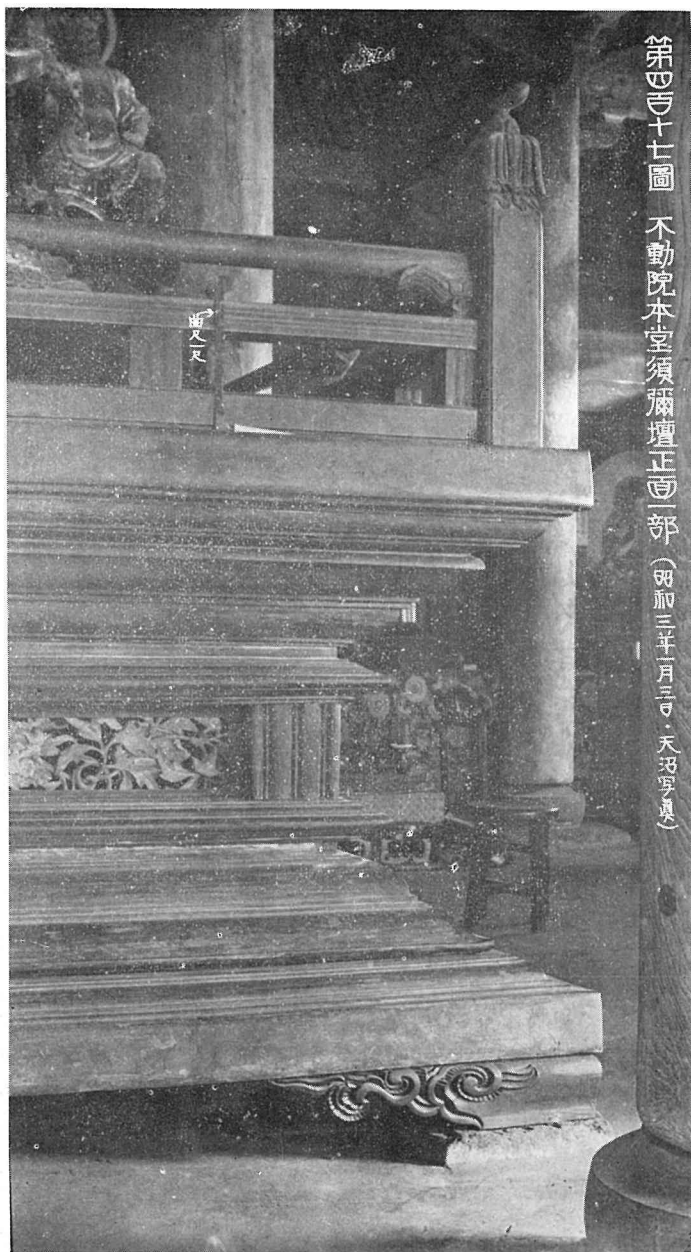
曲尺元

第四百十六圖 定光寺本堂須彌壇一部 其貳 (昭和三年九月十五号、天沼写真)

日本古建築研究の栞 (四十回) (天沼)

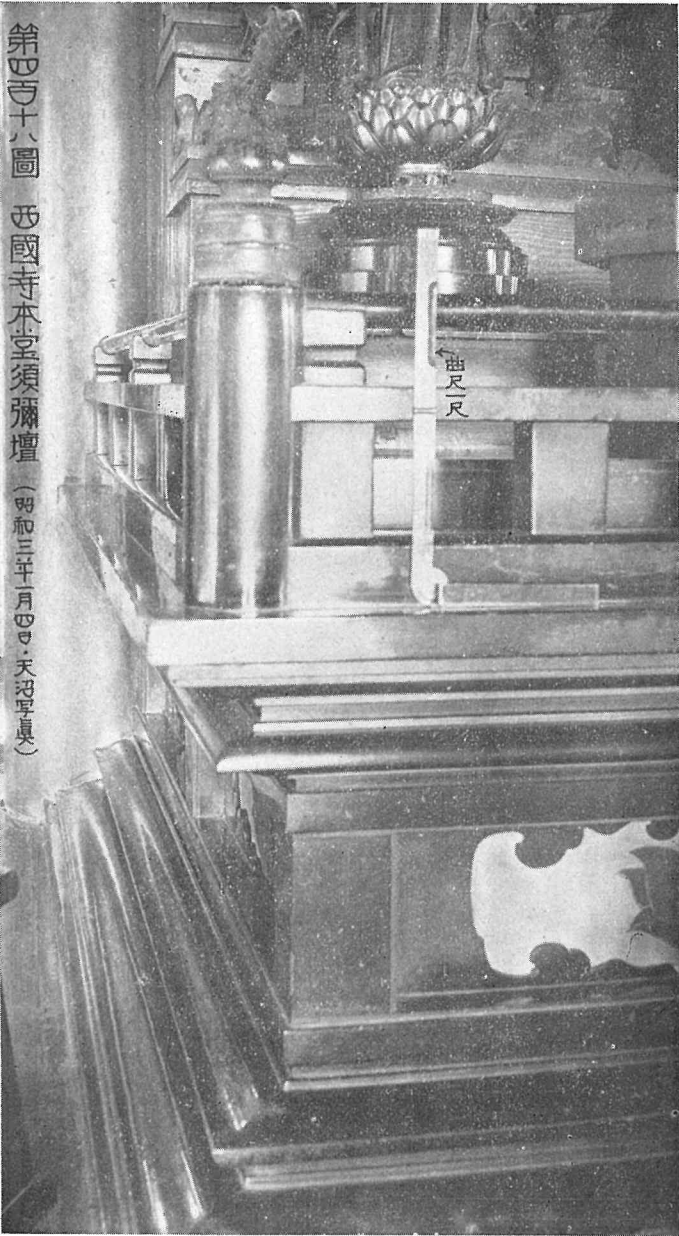
第十六卷 第四號

六六七



第四百十七圖 不動院本堂須彌壇正面一部（昭和三年三月三日・天沼厚真）

西
一
尺

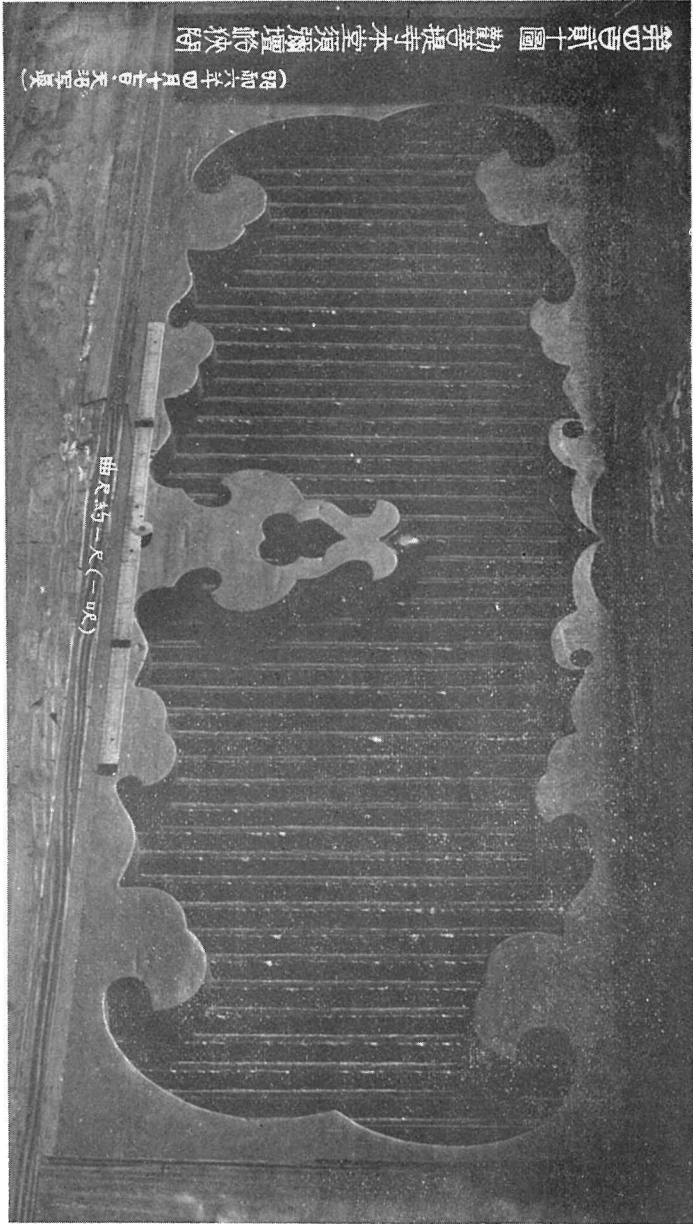


第四百十八圖 西國寺本堂須彌壇 (昭和三年四月・天沼厚真)

日本古建築研究の栞 (四十回) (天沼)

第十六卷 第四號 六六九





第百四十五圖 勸善堂本堂須彌壇格柵

(昭和十四年十月五日 天沼啓)

曲尺約一尺(一呎)

第四〇貳拾壹圖・一乘寺本堂須彌壇正面一部・（昭和二年十二月二十日撮影）



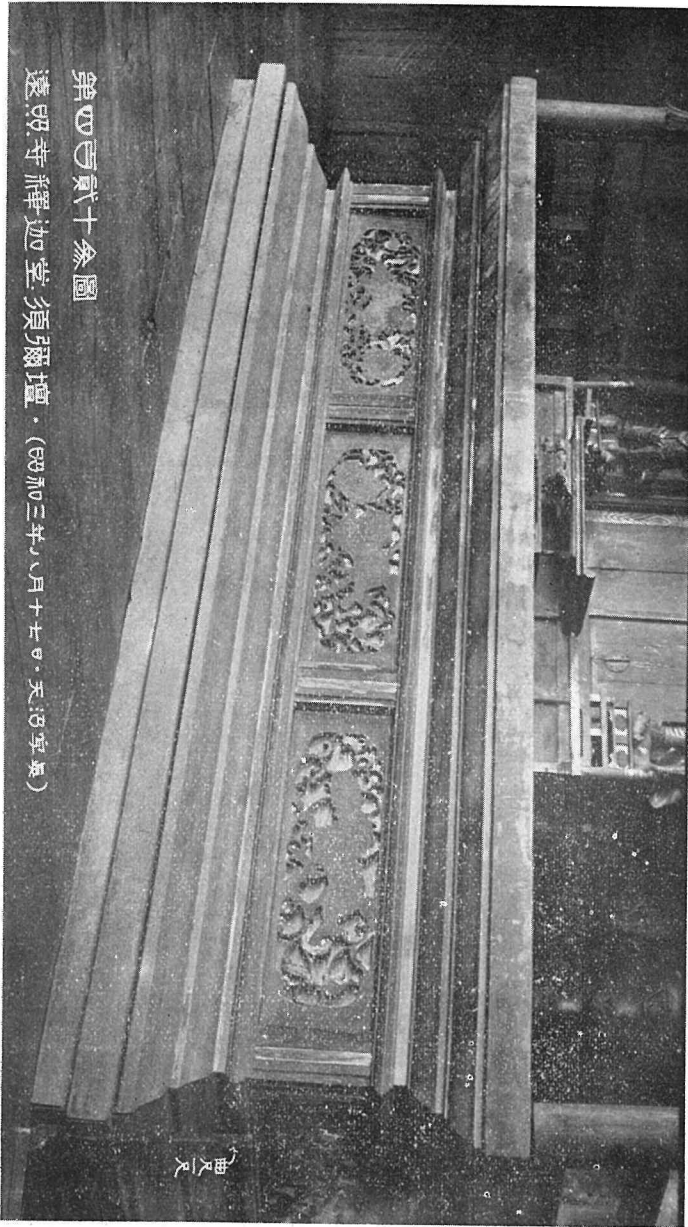
築山寺十感圖 鶴前寺本堂須彌壇枳栲栳

(正徳朝中臣屋敷屋)



日本古建築研究の栞(四十回)(天沼)

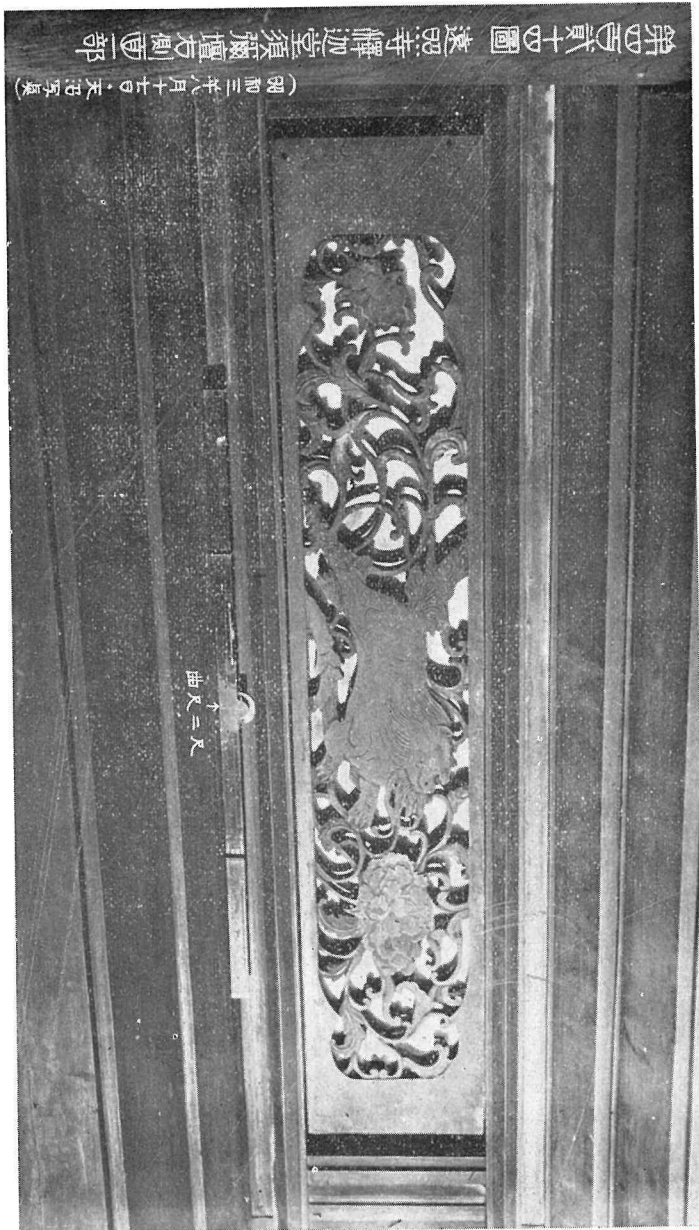
第十六卷 第四號 六七三



第四百貳十參圖

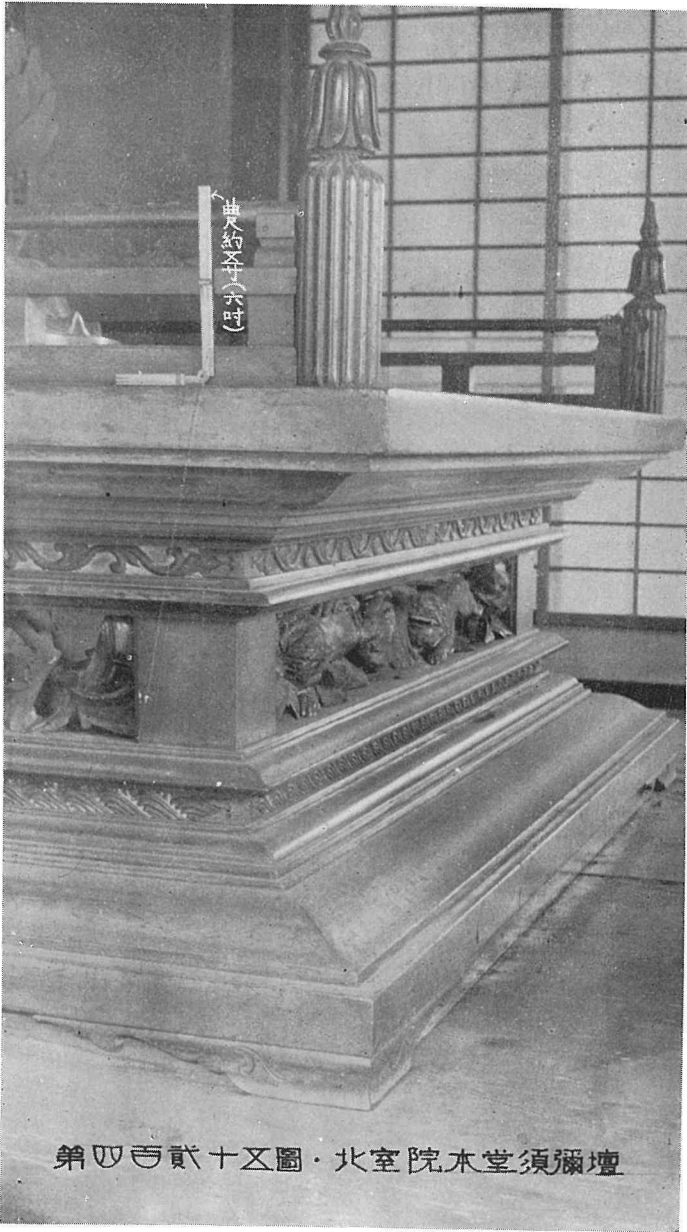
遠明寺禪邊堂須彌壇・(昭和三年八月十七日・天沼寧良)

咫尺



日本古建築研究の栞(四十回)(天沼)

第十六卷 第四號 六七五



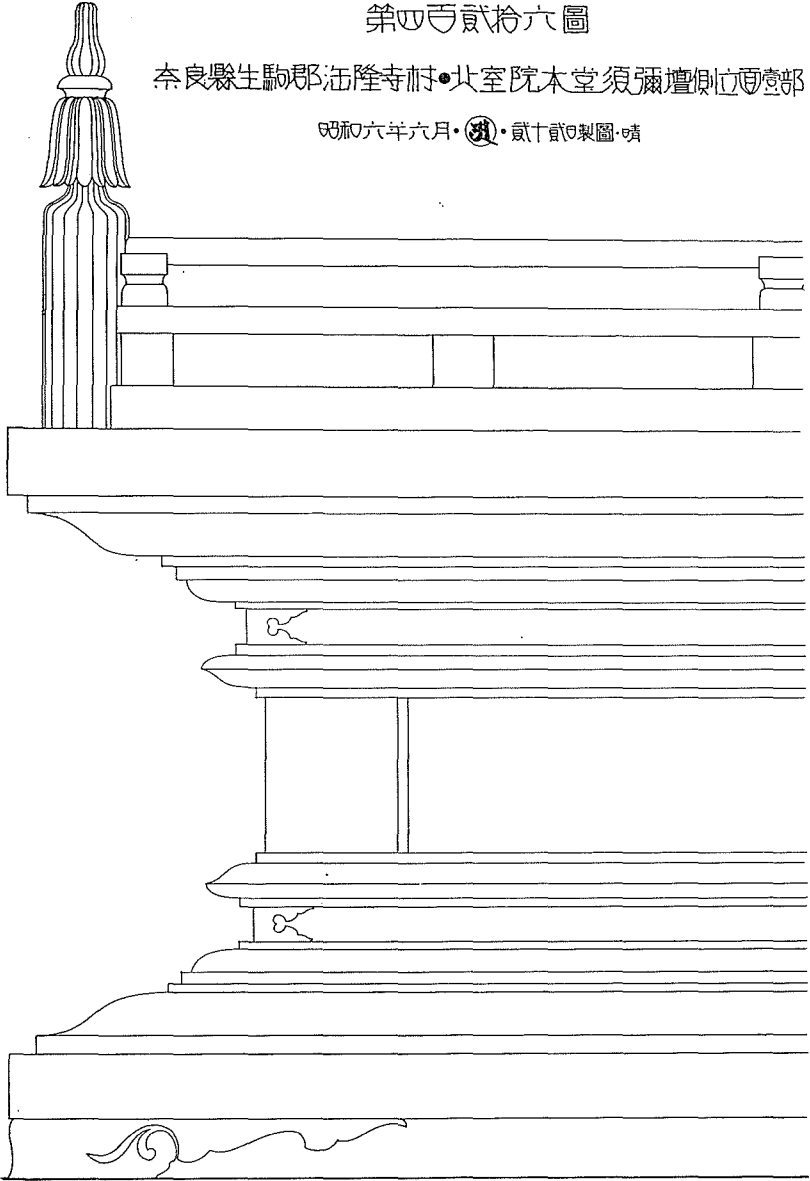
第四百貳十五圖・北室院本堂須彌壇

第四百貳拾六圖

奈良縣生駒郡法隆寺村・北室院本堂須彌壇側位頭壹部

昭和六年六月・・貳十貳製圖・噴

日本古建築研究の槩 (四十圖) (天沼)



第十六卷 第四號 六七七

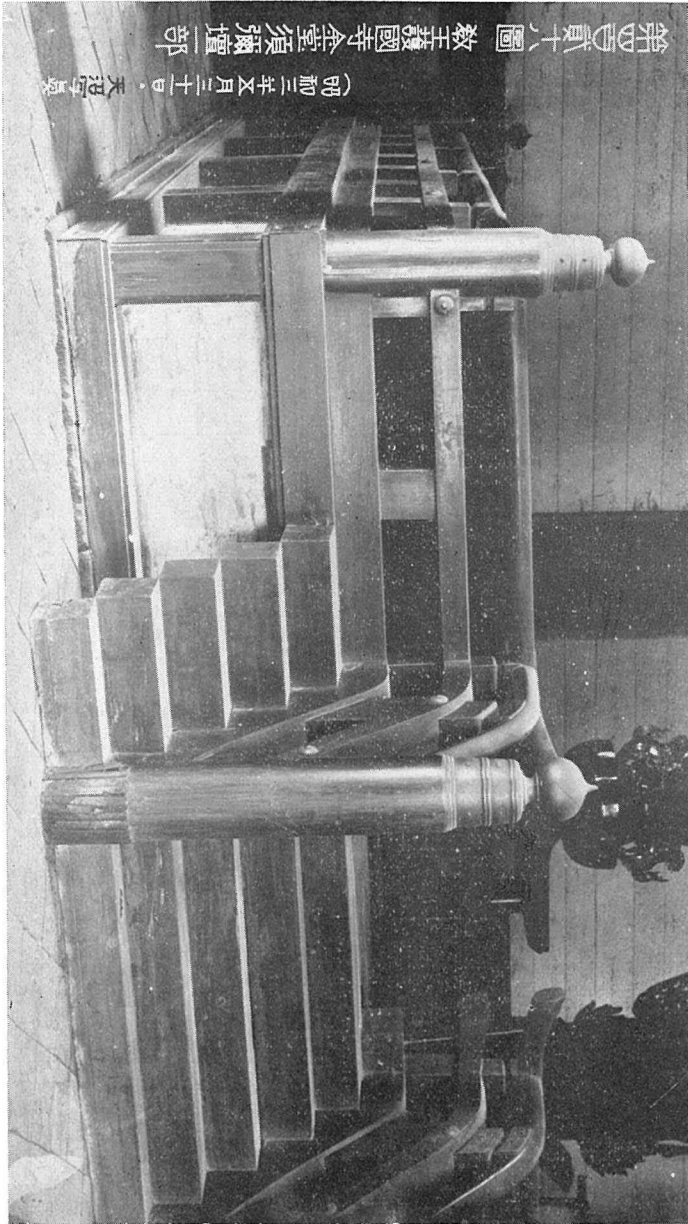
縮 尺





第四百貳拾七圖

東福寺三門巨層須彌壇・(昭和二年九月、天沼撮影)



第百四十圖 教王護國寺金堂須彌壇一部

(卯加三半区月二十日、天沼野原)

日本古建築研究の栞(四十回)(天沼)

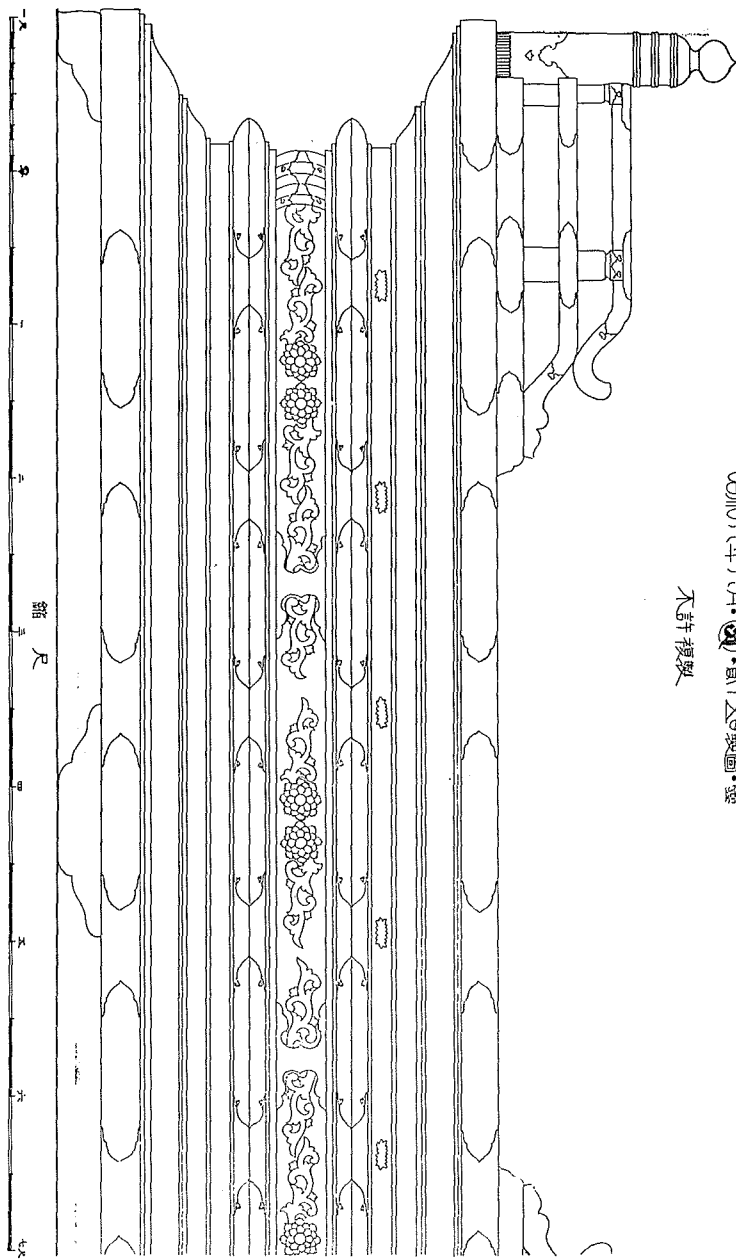
第十六卷 第四號 六七九

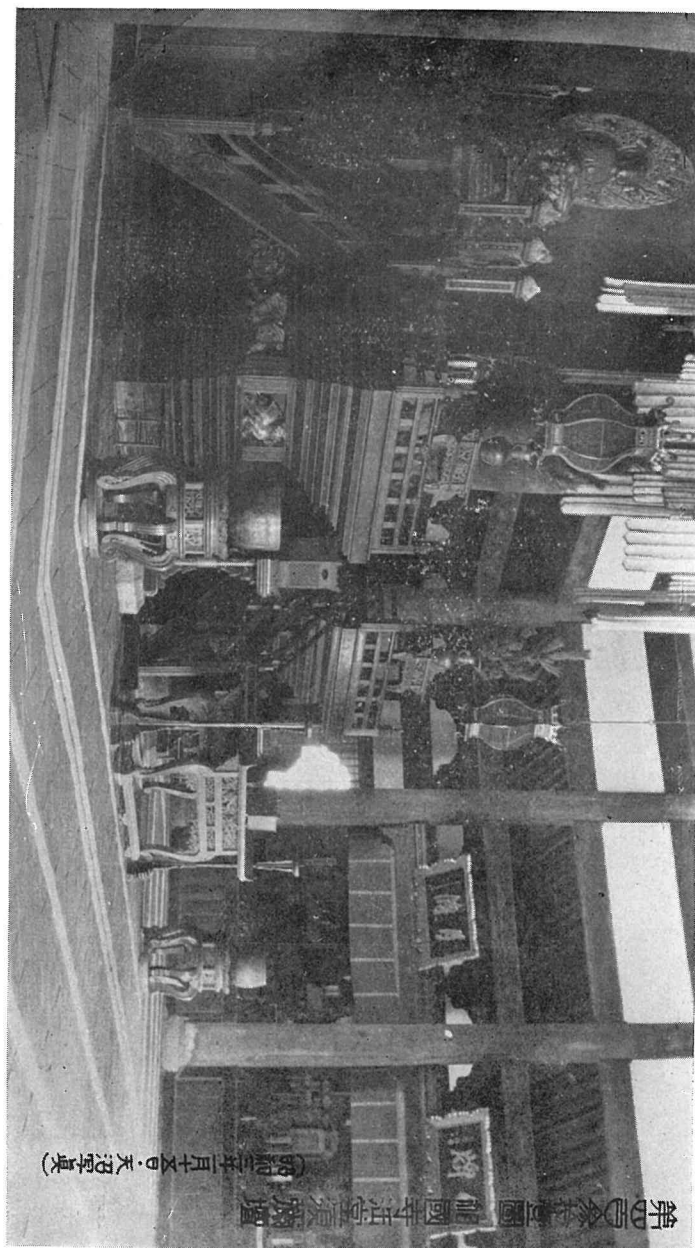


第四〇參十圖・奈良市・法华寺本堂須彌壇正立面壹部

昭和六年六月・(附)・第十四号・築圖・墨

木許複製



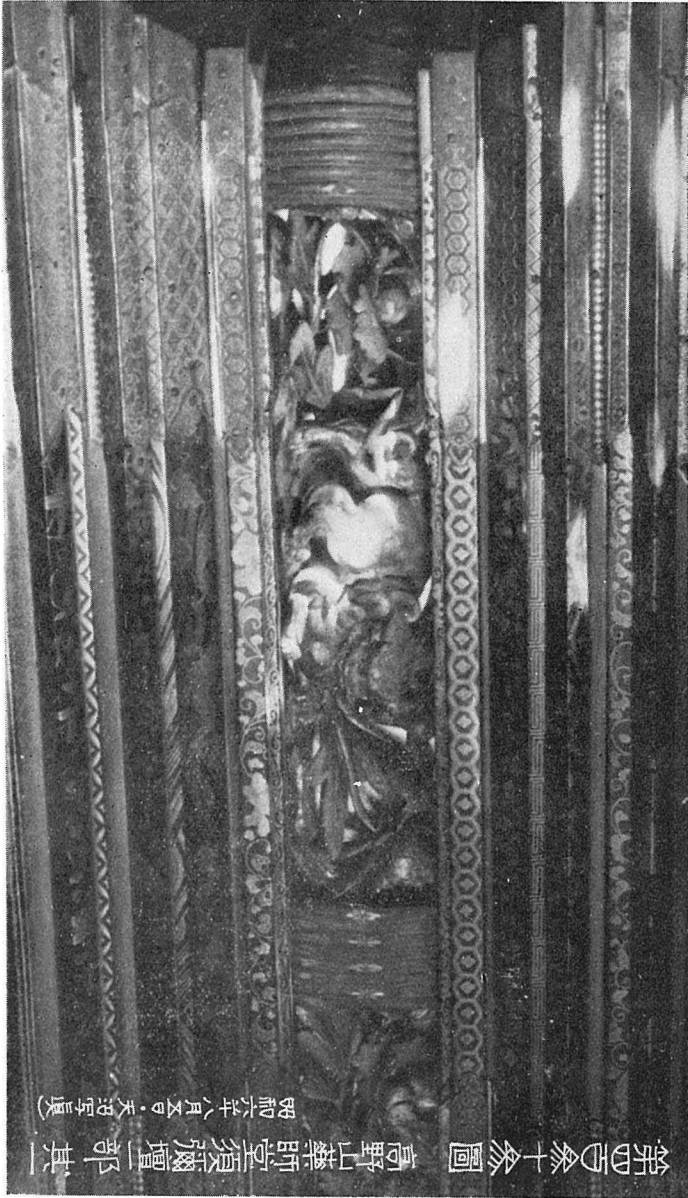


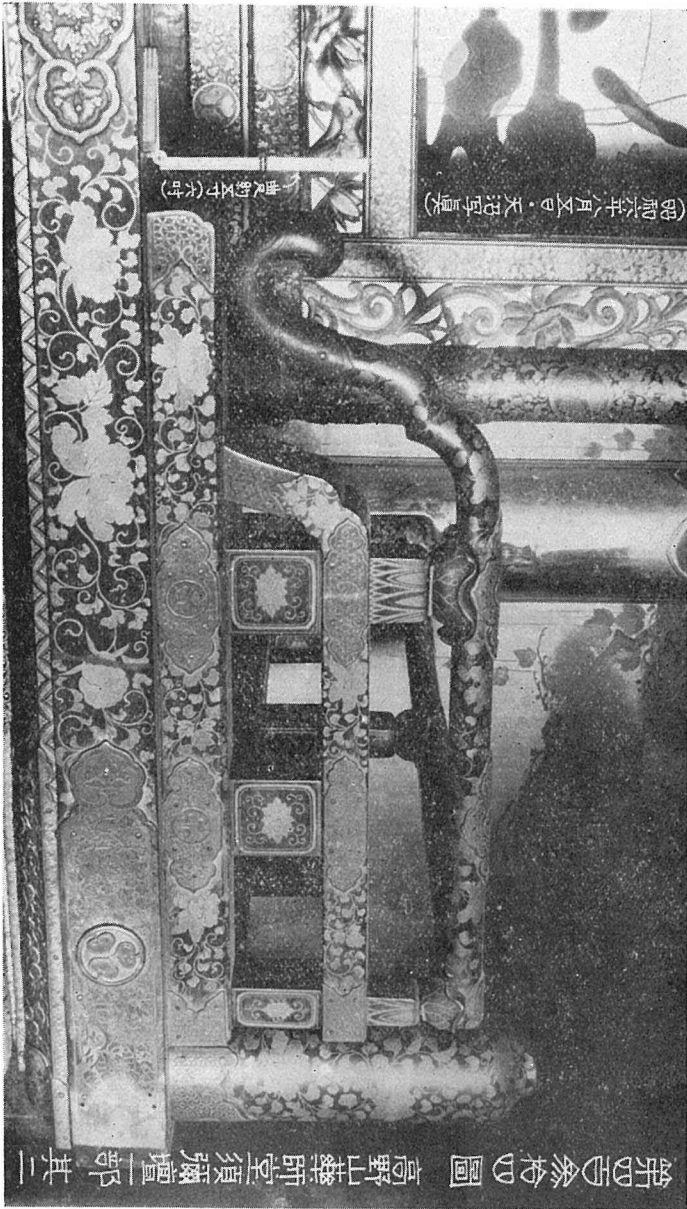


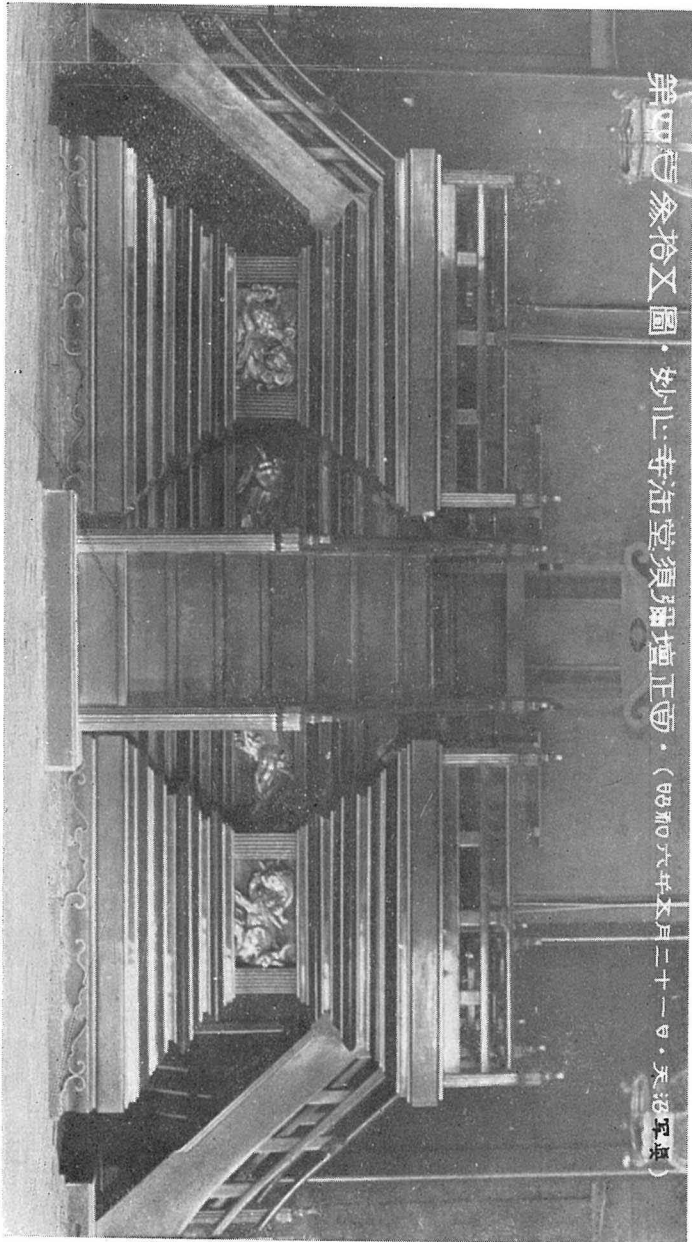
日本古建築研究の葉 (四十回) (天沼)

第十六卷 第四號

六八三







第四百零六圖・妙心寺法堂須彌壇正面彫刻意部・其貳・(昭和六年五月七日・天沼写真)



日本古建築研究の栞 (四十回) (天沼)

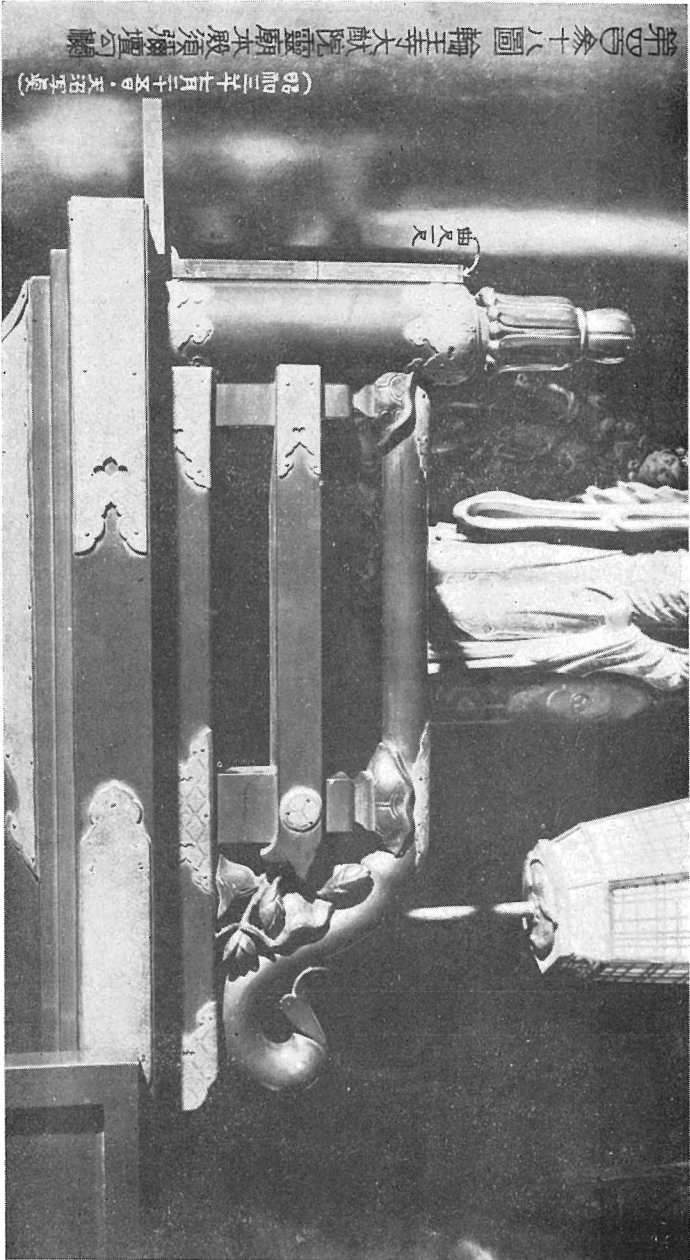
第十六卷 第四號 六八七



第四百參拾七圖

輪王寺大猷院靈廟本殿須彌壇

（昭和二年七月二十五日・天沼写真）



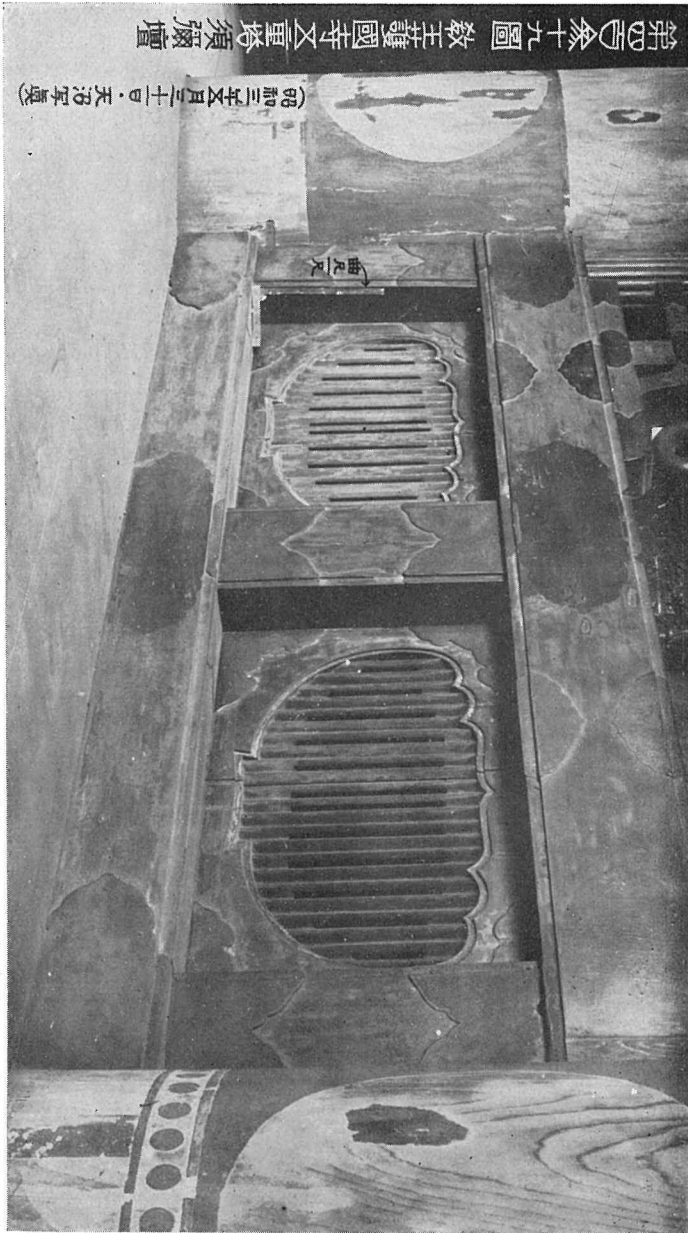
第百八圖 輪王寺太猷院靈廟水殿須彌壇石欄

(昭和二十七年十月一日・天沼野)

日本古建築研究の葉 (四十回) (天沼)

第十六卷 第四號

六八九

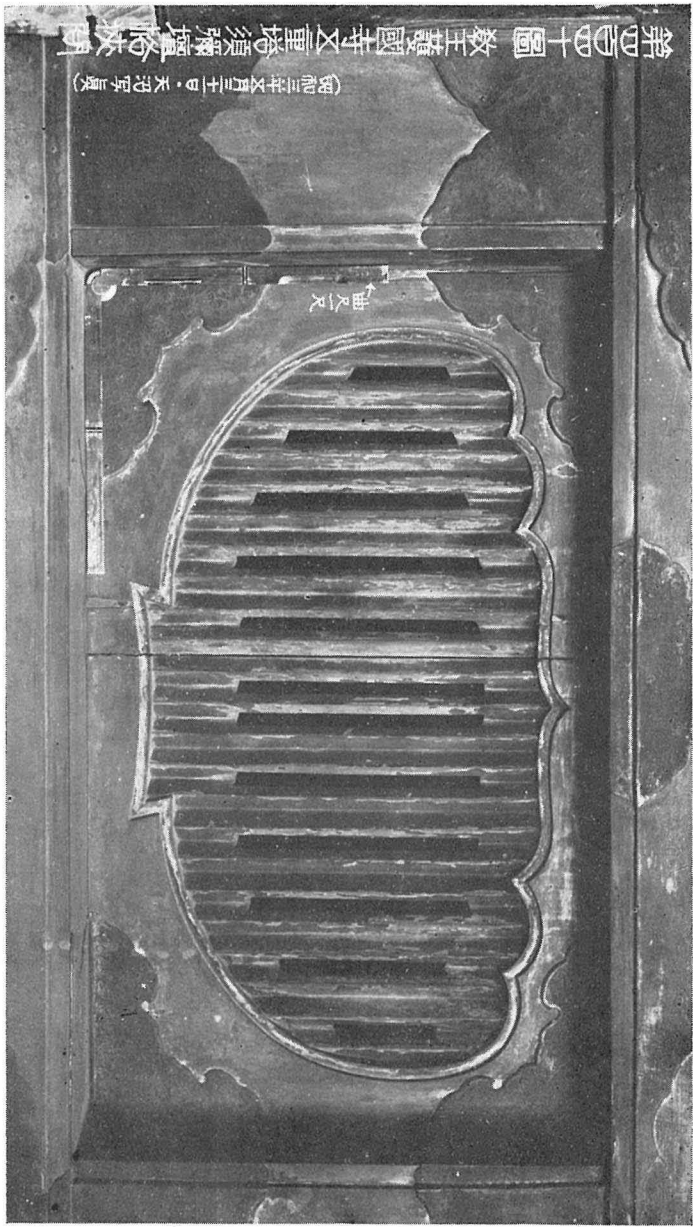


第四卷十九圖 教王護國寺三重塔須彌壇

(昭和二十一年五月十二日 天沼翠峯)

築田田十圖 敦王撰國寺文皇授意撰繪心技師

(築田田文皇十上・天沼田)



日本古建築研究の栞 (四十回) (天沼)

第十六卷 第四號

六九一

「薄彫」(Faintings)の如くになつてしまひ、柱頭の未開と開花瓣との間に、礎盤を逆置したやうなものがあるが、此建物は明應三年で、室町でも大分後の方だから、だんだんこの様に變つてきたのであらう。

此脚をひつくり返せば當代の背の低い板蓋股の如く、簡単な彫刻は桃山時代の若葉の元と考へられ、浪模様は當代及前代の花丸瓦當の文様に普通であり、上の唐草亦然り。さうすると自然此壇がよく時代の様式と一致してゐるのである。たゞ正面勾欄が全部とれて亡くなつて了つたため、側面と同じやうであつたか、それとも途中できれて、架木は炭手の様になつてゐたか、それが判然しないのは惜しいことである（あつたことだけは、親柱内）。
（側にあいてゐる孔で判る）。

第四二七圖は東福寺三門上層の内部で、此は京都に残れる最古の三門で、從て其須彌壇亦さうである。三門上層の須彌壇は常に其全長に沿ふてゐる上に、兩側面の半分だけ前の方に曲つてゐるから、随分長い上に、其まん中のところがすつと前の方へでてゐる。

此種のは總て和様の如く上下に榱あり、其間に適當に

束を入れ、間は羽目板になつてゐるが、其差は下榱の下に脚のあること、勾欄が唐様であること、で、此は此門以降、現今に至るまでさうであるところをみると、多分前代からさうであつたらうと考へられる。

尙其上に勾欄が中央の部分を限り、兩方の羅漢の竝んでゐるところを別に、まるで縁を切つてつけてあり、さうして間をすつと略して、兩端に少しばかりつけてある。全部巡らしてもよささうなものなのに、なぜ間をやめたのか。別段あつたところで、夫れが何かの妨害になつても思へぬし、ないとも幾分淋しいやうである。最もかうやつておけば、全體に巡らすのを略したことにになり、材料と手間と節約できるから、或はこんな方法を按出したのではないかと考へられぬこともない。

併し節約しても何でも、脚と勾欄とは唐様だからまだよろしい。須彌壇は何故に和様にしたか。全くの想像であるが、上層は割合に天井が低いためであらう。壇を唐様にすれば自然に高くせねばならぬ。さうすると羅漢はまだ大丈夫だが、中尊は随分窮屈にならうし、また坐つ

て儀式をするとき、高過ぎて始末に悪い。本家の支那ではどういふ風にしたか知らぬが、例へ佛殿・法堂等に於いては立式を用ひたにせよ、こゝでは坐式——今でもさうであるが——を採用したため、かういふ工合になつたものと考へられるのである。何にしる尾廊を除いた鳳凰堂の平面のやうな形をした、この様に長い壇は、三門の上層に限つてゐる。

以上で實例を終るが、當代のは

前代の續きで、其直系のも折衷様のもいろいろあつた。格狭間内の花模様は發達したが、其輪廓は少し拙くなつてきたやうである。さうして和様の場合でも、格狭間は込み入つた形のを費用した。禪宗伽藍の場合三門の上層には特殊なのが用ひられた。

勾欄親柱には和唐折衷ともいふべき、例へば二重請花の如き開花蓮の上に、未開蓮即ち寶珠をのせた不思議なものもあつた（向上寺）。其他上の曲つたもの（不動院本）又は柱頭柱身の間に蓮瓣のあるもの（西國寺）等、い

日本古建築研究の栞（四十回）（天沼）

ろいろのものができてきた、最も稀れに平桁の先きを下に曲けて縁形をつけ、架木の鼻に鱗を刻みだしたりした（定光寺）。

桃山時代

先づ第一に和様で特別長いのを紹介する。

第四二八圖の教王護國寺（京部）金堂ので、正面三個所に五級の木階がある。これが珍らしいと思ふが、の金堂は正面七間のうち、一間隔きに入入口がついてゐるから階段も三個所につけたのではあるまいか。それにしても此場合かういふ風に階段でもつけなければ、必要があつてあの壇上へでも昇るとき、勾欄を跨ぐわけにも行かす困ることであらう。後に圖示する相國寺や妙心寺法堂の夫れのやうに、或はずつと古く法界寺阿彌陀堂のやうにこゝでは實用と裝飾とを兼ねしめたのであらう。

慶長十年の建築だといふのに石壇の上に建ち、床も瓦を四半敷にしてゐるのは、勿論古式によつたのであらうが、さうすれば此壇またさう思へなくもあるまい。さう

第十六卷 第四號 六九三

すると延暦十五年のときの金堂の須彌壇もこれに似たもので石で造つてあり、羽目板(羽目石といふべ)には格狭間が刻んであつたかも知れない。さうして擬寶珠勾欄が廻らしてあつたことも充分稽へられるのである。

第四二九・第四三〇圖は大和國法華滅罪寺本堂のものである。慶長六年の建築であること、此須彌壇も亦、同時の作であることは、雙方共擬寶珠の銘が證明をしてゐる。

此をみて第一氣のつくことは、飾金具を澤山に打つてあることであらう。和様のに打つたのは金剛輪寺のにあつたし(第三九六・三九七圖)、唐様のは延慶四年の長保寺本堂のがさうであつた(第四一〇・四一一圖)。併しながら後者の場合は、後になつてから打添へたものと思はれるから、あれは例にならない。室町時代のものでは、常樂寺三重塔のに打つた跡があつたと記憶してゐるが、今どうもはつきりしない。とにかくあつたにしても稀な方であらねばならない。さうすると此等は早い方であらう。而もかう澤山に打ちつけたのは、それはどうしたつて前代に見出せぬと

ころである。

其飾金具は蓮花唐草を一面に彫付けたもので、殊に上下線形の中の羽目板の蓮は、平たいのでは氣がすまぬのか、子房も花瓣も刻みだしてあるところの、大分念入のものである。飾金具が斯様に美事である上に、全體漆塗で、たゞ中央の羽目板に近い玉縁と、勾欄架木とが朱漆で塗つてあるから、一屬美しいのである。

元來法花寺本堂は、普請が随分粗末である。慶長六年秀頼公御母堂御建立、片桐且元奉行、と椽勾欄擬寶珠にほりつけてある位だから、もう少し奮發して相當なものを建てればよかつたのに、叮嚀にしてゐるのは向拜の手挾位で、あとは氣の毒な位であるところをみると、節約緊縮といふことは、こんな時代から既に少しばかり上流社會に流行してゐたと見える。

之れに反し須彌壇はいやに立派で頗る上等、先づ當代代表的の一とすることが出来る。實に此壇——と其上の厨子と、其内の本尊と——あるがため、此堂は光彩を放つてゐるのである。

上下縁形間の羽目板の兩端にある束は、眞直でなく上方に少しく曲つてゐる。かく束が彎曲しだしたのは桃山からのやうである。さうして中間には臺股の崩れたやうな束を入れてあるが、かゝる形は唐様勾欄の平桁と地覆との間によく見出さるゝものである。

第四三一圖は慶長十年の建築なる京都市相國寺法堂(正堂)ので、次圖と共に近代唐様須彌壇の好例である。

法堂は大きく背高く廣いせいもあらうが、壇は非常に高いし、従つて昇降用の階段も、洵に堂々たる美事な大規模のものが架けてある。壇の中央部羽目板には、最も美事な牡丹に唐獅子を入れてある。牡丹は極彩色で唐獅子は金色を善通とする。階段は正面と兩側面とに設け、其勾欄は、地覆と彫桁とが一木より成り、下端に眉をとり、上端は下の親柱に近く少しく上に反らしてあり、そこに唐草を彫刻し、其昇勾欄は上に登つてからは、壇上の夫れと連絡をしてゐる。此壇には飾金具は打たないで、全體を漆塗としてある。

何故此種の堂のに限つて、かゝる大規模な階段を設け

るのかといふに、管長といふやうなゑらい坊さんが、此壇へ上つて儀式をするからださうである。佛さんを安置してあるだけなら、こんな設備の必要のないことは勿論である。大徳寺でも妙心寺でも、法堂のといへば大概かうである。だから萬福寺ののやうな簡單なのをみると、どうも物足りなくていけない。

桃山時代の例はこれ位にしておいて、次は江戸時代

に移ることにする。

第四三二・四三三・四三四圖は、高野山の薬師堂の須彌壇である。金剛峰寺の所有といふことになつてゐるが、鍵は靈寶館にある。

薬師堂と位牌堂と、二棟並んで波切不動尊の後方の高地にあつて、同大同式、方三間寶形造一間向拜附の建物である。此は元と徳川家で建立したもので、向て右は薬師堂、向て左は位牌堂で、其建築年代に就ては

寛永十二年兩府尹小出大和守吉英、戸川土佐守正安將に台命を受けて御宮御靈屋尊牌堂並に本坊等を造建

せんとす、同二十年癸未落成す、其美贅言を絶せり

とあるが、外部は棧唐戸綿板及び壁面の彫刻は殆んど全部盜まれ、椽の勾欄はくだかれ、随分ひどくあらしてある。併し内部は柱・長押・臺輪・料拱等に美事な極彩色があり、壁にも鷹(藥師堂)・獅子・牡丹(位牌堂)等が描いてある。總てよく残つてゐて、被害は割合に尠ない。

其須彌壇及び壇上の宮殿(厨子)は取分け美しく、ほんとうに「贅言を絶」してゐる。第四三二圖は其全形で、これは藥師堂の分だが、位牌堂のも同じだから、一つみれば充分であらう。唐様の壇に黒漆を塗り、飾金具を打ち、間の地は全部牡丹又は蓮唐草・蓮花瓣・幾何模様等を金蒔繪で現はしたもので、羽目板には牡丹に唐獅子を入れ、束は法華寺の如く、少し彎曲してゐる(第四三三圖)

勾欄また同様の裝飾を施した善美を盡したもので(第四三四圖)、殊に蓮葉束の意匠が面白い。即ち架木と平桁との間の部分、蓮葉から下の裝飾が展開せる蓮花瓣から成つてゐるのは、殆んど類例がないといつてもいい、のみならず、其描法が洵に變つてゐるから、これが若し金蒔繪

でなくて、さうしてたゞこの部分だけ見せられたなら、私は到底寛永などといふ新しい年代へはもつてくることのできぬと思ふのである。

親柱の柱身は第四三四圖に明らかに見えてゐるが、不幸にも柱頭がない。漸くにして柱頭は來迎柱についてゐる半分が残つてゐるだけであつて、もう一方のものもない。ところが幸ひに位牌堂のは全部あるから、それで判るが、其代り架木の先の蕨手は、この分が残つてゐるだけで、他のは皆折れてゐる。殊に第四三二圖の向て左のは、架木全部(正面の分だけ)を失つてしまつてゐる。これのみならず、羽目板右端の牡丹獅子の彫刻がない。此等は決して自然にこわれたのではなく、總て暴力を以てもぎ取つたのである。此壇上の宮殿の扇樞も、非常に美しいものであるが、言語道斷の行爲のあとが歴然と残つてゐる。柱頭は朱漆塗で、中央の凹いところは金箔がおいてある。だから實に綺麗で、これ等の裝飾は到底凡工の企て及ばざるところ、其上に金銅飾金具で一層引立つて見えるのである。

飾金具も亦、時代が何にしる寛永だから、なさけないことに、恰好の上からさう感心のできぬ點もあるが(三四圖上框のなどは)、たゞ線刻などはせず、地をすきとつて其一例である)、また、線刻などはせず、地をすきとつて模様を浮かせ、金具の上に金具を打つといふやうな、手の込んだ方法をとり、また「蝦の腰」(エビノコシ)。唐様須の込んだ方法をとり、また「蝦の腰」(エビノコシ)。唐様須の彎曲したものをかく名づく。この場合羽目板は平たいが彫刻でよく判らぬし、東は彎曲してゐるからさう言つてもいいと思ふ)のところが彎曲した、等間隔に置かれた束は、全部金具で覆はれてゐて、さうして其圓く膨れ上つてゐるところの中央に、一つ／＼七寶が入れてある。

要するに「其美贅言を絶せり」とは、まことにうまい形容で、どうもこれ以上うまく言へない。讀者諸君若し高野へ行かれたら、是非一見せられんことを特に勧告するのである。この様なのは、喋るより書くより、正に一見に如かないから。

第四三五・四三六圖は、京都市花園妙心寺法堂須彌壇全形及び正面中央(階段で隠れ)羽目板彫刻の一部。此建築は明暦三年ださうである。此等のうち最初のは壇全體

を正面からみたところで、壇だけを充分見せるため、總ての裝飾を取去つてしまつたので、さつぱりとしてゐる。但し壇上には椅子一脚と、小さい机が二脚おいてある。

三方の階段の地覆兼彫刻の上端が、少しく上の方に反つてゐるところも前例と同じであるが、唐草の彫刻は略してある。勾欄親柱が八角形で胡麻殻決りのしてあることや、羽目板に牡丹に唐獅子の入れてあるところ等も亦同じことである。ただ此際壇の後方に大きな障屏のやうなものがあつて、随分背も高く、側面や背面からみると、少しばかり面白ところもある。この障屏を寺では「後屏風」といつてゐるさうであるが、相國寺にはこれがない。

第四三六圖は壇一部を大きく見せたと同時に、羽目板の面につけてある獅子や牡丹を大きくしたのである。東の断面は當代大瓶束の如く、擺線形になつてしまつたが、殊に正面階段兩脇のでた部分の獅子は中中の傑作である。第四三六圖は、中央が牡丹に萬年青で、其兩方から獅子が向ひ合つてかけてゐる所であるが、獅子よりは

添物の萬年青の方が、遙に我々の興味を惹くのである。

牡丹に唐獅子とは既に多くの例を圖示したやうに、鎌倉室町に於いては至極平面的であつたが、これは殆んど

——此のみではない前圖のも——丸彫といつてもいい位にまでなつてきた。萬年青の方は室町時代になつて初めて現はれたもの、如く(書寫山園教 寺設法堂)、桃山時代に於いては單獨に用ひられたが(醍醐寺三寶院泉殿)、同時にまた他の植物に配せられたのもでき(日光東照宮 廻廊莖殿)、それからは大槪副へものとして使はれたやうである。此等はその一例であり、形は鳳梨とも見えるが、勿論萬年青と見るべきものである。

此種の須彌壇に於いては、正面だと左右相稱で大分形もいゝが、側面からは左程でない。束のところ迄左右から同じやうに狭めてくると、側面では全く形がとれなくなる。故に總て仕方なしに途中まででやめにして、あとは縦形を奥まで通してあること、第四三一圖の如し。ところが新築の堂において、かうしないで束のところ迄兩方から狭めてきたため、不思議なものになつてし

まつた。いづれ埋木でもして直さずにはおけないだらうが、當分みつともなくて頗る醜態を曝露してゐる。

第四三七・四三八圖は、日光輪王寺大猷院靈廟本殿の須彌壇で、前に圖示した法花寺のによく似てゐる。此も亦彼と同様に飾金具を以て綺麗に裝飾がしてあるが、殆んど總て朱漆が塗つてあるから、朱と金とで随分に美しい。併しながら壇全體の形も、勾欄も飾金具も、時代が新しいためか、どうもさう推奨できぬやうである。中央の束の膨れ方が非常に劇しい。羽目板の牡丹と獅子も餘り精巧に過ぎてしまつたやうである。

勾欄に於いて注意すべきは、親柱の上下——下のは例が多いが——に金具を打つてある事と、柱頭の未開の部分(通)が萎縮して(？)球のやうになつてゐる事と、夫れから(通)束が料と蓮葉と半々になつてゐる事と、平桁の先が少しく下を向き、そこから花と蕾と葉とが澤山にでてる事と、先づこれ位である。

他のがまんができるが、半料の上に蓮葉をつけた束は、大墮落で怪しからぬのみならず、見たところ不愉快

である。いくら、新意匠でも、これはいけない。平桁の先からは時には、蓮の代りに牡丹の花だの蕾だの葉だのをだしたのも、時には新しいものには見出されるが(京都市南禅寺三門上層須彌壇勾欄)、何れにしても多く飾つて立派に見せやうとした結果、かう澤山にしつこくしたのであらうがこれではまるで籠の内に果物を盛り上げた如く、大分に無理におし込んであるから、徒にゴチャ／＼してゐるばかりで、大して感心ができない。

あの様に江戸初期の代表的建築の須彌壇としては、立派は立派であるが、嗜好や裝飾法は、まだ考慮の餘地が充分にあると思はれる。

最後にもう二圖掲げておく。

第四三九・第四四〇圖は、京都市教王護國寺五重の須彌壇及び其羽目板格狭間を大きく見せたのである。五重塔に於いては、四天柱間に須彌壇を設けるのは、普通の扱方であるが、あの塔があの様な復古建築であるから、此も亦和様にしたのは、調和といふことをよく考へた結果と思はれる。ところが其勾欄を唐様にしてゐるのは、

やはり時代は争はれぬものだ、といふことがよく判るのである。而して此場合、羽目板に刻してある旨連子入の格狭間の、谷のところへ細長い窓をあげてゐるのは、他にみない手法である。

此格狭間の形は中々よろしい。寛永十八年としては洵に上できである。下の糸底に當るところを上に戻らしてゐるのは、既に圖示したやうに奈良時代からあつたことで、偶然の一致かも知れぬが、で初めて試みられたのではない。上下の框(こ、では束も羽目板の四隅も)に飾金具を打つ事も他でもやつてゐるのだから(上醍醐五、此も亦こ、での大十堂)、新發明ではないが、羽目板の四隅のそれは、塔の壇の羽目板のやうなところについて見た事がない。旨連子谷の細長い孔は、床下の通風を顧慮して、あらうが、それなら唐招提寺講堂や不退寺本堂の、やうに(共に圖示してある)間のあいてゐる連子にすればいゝのである。別に旨にしておいて、更に細長い孔をあける必要はなからうが、或はあとから氣がついてかうしたのかも知れない。

* * * * *

桃山江戸時代に於いては、三門には前代同様のが用

ひられ（知恩院）、和様のものは、時に堂の形に應じて

長く、實用兼裝飾の階段をつけたりした（教王護國寺金堂）、

また時には下榑下の展開せる蓮花を、上榑の上につけた

り（室生寺彌勒堂）、或は平凡なる和唐折衷の壇とし、吹寄の角

束を有せる略式勾欄を用ひたりした（法隆寺普門院）、稀に格狭

間内の旨連子に通風のためか細長い孔をあけたりしたのもあつた（教王護國寺五重塔）。三門のを除いては、此等の壇に用

ひてある勾欄は、純粹の和様又は唐様の場合もあつたが

多くは當時の建築様式と同じく混淆折衷されたものであ

つた。

唐様のは漆塗として裝飾金具を充分に打ちつけたり

（法花寺本堂）、又は上下に多くの縹形をくり返へし、昇勾欄

附の大階段を正面及側面に三所設け、總て黒漆塗とし、

幅の狭い玉縁は朱漆を用ひ、羽目板の部分は極彩色を施

したる牡丹と、漆箔をおける殆んど丸彫の唐獅子を入れ

たりした（相國寺法堂妙心寺法堂）。或は全部黒漆塗金蒔繪金銅飾金

具を打ち、羽目板には金地に極彩色の彫刻を入れ、親柱

柱頭を朱漆塗として、極端に裝飾をした（高野山藥師堂位牌堂）。

また黒漆塗の代りに朱漆を用ひた、め、一層美しくなつ

たのもあつた（日光大猷院靈廟）。勾欄平桁の鼻よりは、時に數

多き花・葉・蕾等を出し、架木と地覆とにて形作れる空間

殆んど全部を充したりしたのもあつた（同上）。

結 語

去る大正九年一月一日發行の本誌第五卷第一號へ、初

めて執筆以來、翌十年十月から十二年七月に至る滿二年

間、不在のため掲載を見合せたが、更に同年十月より續

いてかき、今日に及んだのである。だから丁度滿十年間

甚だ場所塞けをしてすまぬ事であつた。まだいくらでも

書かねばならぬことがあり、當分の間は限りがない。だ

から私自身でも、この様な調子でかいてゐたら、いつに

なつたら終るのかまるで見當がつかぬ。そこで諺にも十

年一昔といふし、何事にも新陳代謝は必要であるから、

丁度第四十回を限りとし、無理に須彌壇だけを片づけて

やめることにした。今から初めの方を省みると、まるでいけない。最初先

づ二年間八回といふことであつたから、それでおさめるつもりか何かで始めたところ、だん／＼できない事が判つてきたので、少しづつ精しさを増し、遂に如何ともしがたくなつてから、思ひ切つてすつと詳細にやりだしたのであつた。だから古い言葉だが全く繁簡當を得ないものができ上つて了ひさうになつてきたのである。

私はこれで諸君にお別れをするが、訂正増補の目的で初めの方を全部かき直し、あの方をもつけ加へて、いつか一度は首尾一貫した、もう少し纏つたものにつくり上げ度いと思つてゐるが、一三年ではできさうもないのを遺憾とするのである。

* * * * *

永い年月の間、勝手な事をかゝしてくださった役員諸君それを辛棒してくださった讀者諸君に對し、お詫とお禮とを述べ、京都帝國大學名譽教授三浦文學博士に敬意を表して擱筆する。(昭和六年九月一日稿了)

正 誤

第十五卷第四號第六五〇頁に掲げた第三五三圖に喜藏院窓としたのは、常喜院窓の誤り。同六六一頁上段第二行目、同じく喜藏院とあるのも、同様常喜院の誤り。